

(投稿者：フェイ)

「ん……っふう…」

少女は、くっ、と一つ伸びをして芝生へと寝転がった。
真っ青に気持ちよく晴れ上がった空に、時折鳥のような影が横切る。
彼女、アムはよく知っている。
あれは、自らと同じMAID　そしてアムの所属する予定の、ルフトバツフェの空戦メード達だ。

「……………」

すっ、と再び横切る影、
空へ美しく残る白い筋　白い翼を持つ空戦メード達で構成された第一級戦闘小隊「白の部隊」だ。

(僕もあの中に)

手を伸ばしてみる。
直接触れられるわけではないが、それでも手を伸ばしたくなったのだ。
その、真っ白な　。

「素晴らしいな」
「…！」

横から声が聞こえ、慌てて起き上がる。
そこに立っていたのは、一人の少女。
赤い服を身にまとい、細く美しい黄金の髪を風が撫でるままにたなびかせる。
どこか不遜な、しかし見下される感覚よりも、誇らしく思えるような少女は、不適に笑ってウィンクを一つ。

(……シーア…！)
「すまん、君、驚かせてしまったかな」

シーアは起き上がったアムの横へと腰掛ける。
そのまま、その横顔に注目するアムをちらりと見た後、空へと視線を向ける。

「あ、あの…」
「君は？」
「え？ ……あ、アム…です」
「アム？ ……ああ、確かララスン殿が言っていたな、君が新しく白の部隊に配属される…。私はシーア。想像通り、空戦メードだ」

当然、アムも聞かされていた。
通常空戦メードに比べて三倍のスコアをたたき出すという、「赤の部隊」の隊長、
赤の幕星、レッド・パロン　シーア。

「……………」
「彼女達を見ていたのか。……いいな、彼女達は、私の翼の色とはまた違う…あれも素晴らしいものだよ、それに空もだ。そして、あの白さ」
「……好きなんですか、あの白」
「美しいものが嫌いな人がいるのかね」

確かにその通りだ、とアムは思い、再び空を見上げる。

「……綺麗な、そしていい眼をしているな」
「…そ、そうですか？」
「見えるのだろう？ 彼女達が」

互いの顔を見ないままではあるが、一つ頷く。
それだけで理解してもらえたような気がして、心が通じ合った。

「…こうしていると、やはり信じられるものだな、人と人が通じ合うというのは」
「はい…貴方ともこうしてわかり合える」

また一騎、突出した空戦メードが、空に大きな弧を描く。
くると、宙を返ってみせた瞬間、その翼と共に、大きくスカートが翻った。
時が、止まる。

「ああ、アム……………」
「……………パンツが見える…！」

「何をしているお前達はあああっ！！！」

「ふ、ララスン殿、相変わらず息災そうで何より」

「お前達のお陰で胃に穴が開きそうだ...。というより何をいきなり意気投合してるお前達は！！」

「演習を眺めるには絶好のポイントだって、教えていただいたもので...」

「そうだ、演習を眺めるには、絶好のポイントだ！ 誰が他の隊員達の下着をのぞけとிட்ட！！」

「ララスンさん...僕に『お前はシーアすら超えられるヤツだと思っ』っていつてくれたじゃないですか！！」

「どういう解釈をしたらそうなる！？ そっちの意味で越えんでいい！！！」

「僕は.....あの人に勝ちたい！！」

「だから勝つなといつているんだそしてシーアを指差すな！！ そんな暇があるなら早めに合流して演習に参加してもらおうか！」

「ハハハ、なるほど、これは将来有望だなアム！」

「シーア.....笑い事じゃないぞ...全く」

「アムの部隊参加はいいことだろう、ルフトバッフェがにぎやかになって良い」

「私の胃に対するストレスのかかり具合が倍になってくるんだがな...」

「三倍じゃないだけいいと思ってくれ」

「~~~~~っ」

「おっと、次は黒の部隊の番か...こちらも演習のはじめねばな」

「僕も戻って部隊の皆さんに挨拶をしないと」

「あ、こら！ お前達、まだ話は終わってない！！ 待て！！」

「.....全く、手間のかかる生徒達だ！」

「ところで、シーア」

「どうした、アム」

「.....普段から赤い下着ですか？」

「...！ ...ふ、屈む一瞬で覗いていたとは...やるなアム、それでこそ...！」

「おまえ達は.....っ！！」

おわれ

関連項目


